

教 仏 名 聞

第 3 9 号
(発行日)

2 0 1 3 年 1 2 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 6 6 3 8 1 1 3 西宮市
甲子園口 2 丁目 7 - 2 0
電話・FAX (0 7 9 8)

6 3 - 4 4 8 8

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月 2 2 日 午後 2 時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月 2 日と 1 2 日 午後 3 時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月 6 日 午後 7 時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月 1 8 日 午後 6 時 3 0 分始。

* 8 月 は 2 日 の念仏座談会と 6 日 の聖典学習会以外は休み。

現代人の苦と仏法

現代人の不安は、その多くは生活不安と健康不安といつても過言ではなからう。

生活不安があるから会社勤めや商売に励み生産活動に力を入れるのである。そして、収入が減ったり失業したり損益が出たりすると、生活不安はより深刻になる。

「収入がこれ以上少なくなると将来どうなるのであろうか」「商売がうまくいかなくなる」と食えなくなるのではなにか「景気が悪くなる」とやっつけいけなくなる」などという不安は、何時代の人々の中にある不安である。

この不安をなんとかしたいので確かな収入の安定をはかる、それが人間生活の中心課題となっている。

又、この不安が元で、神々への祈願もなされる。私のいる西宮市には西宮神社があり、それは商売の神様いわゆる「えべっさん」で有名である。毎年一月十日の縁日には遠近各地からきわめて大勢の

人々が押しかける。「商売繁盛、笹もつてこい」というフレーズで知られている。

また健康不安も大きい。ことに老齢期になると、自分の健康に自信がなくなっていく。「この病気が治らないとどうなるのか」「治らぬ病気にかかるとおしまいだ」「今は健康でも明日は分からぬい」などの不安は日常的に起こってくる。この不安を解消するために、食事に気をつけたり、定期的に検診を受けた

り、ジョギングやヨガなどをして、時にはお地藏様や観音様に無事健康を祈る。

このような生活不安や健康不安のゆえに、さまざまな対策をこうじて、その解消に努めているのが私たちであるが、こうした不安はその浅い深いや大小の違いはあっても、一生ついてまわる。

実際、これがあるから人間は努力し工夫して、今日の人

間の文明を作ったとも言えるし、一方で、生活不安からいろいろな争いや人間関係のごたごたも起こる。

こうして不安から解放されたいがために、さまざまな対策がなされてきたのであるが、不安が起こる原因を仏教の教えに照らしてみればどうであろうか。

それは自分の身体をこそ「私」とし、この身体的な我に深く執着し愛着しているから起こるのであると、仏教では説かれている。

私たちはなんとなく自分の身体をこそ私自身と思っている。毎日二・三度は、鏡に映る自分の姿を見て「私」を確認し、これを「私」として念を押して「この身体が私自身で

《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日 (日)

午後二時始

ご講師

大谷派教学研究所所員

高間重光 先生

* なお十二月二十一日は午前十時より
勤行・法話(念佛寺住職)があります。

ある」と知らず知らずのうち
に思い固めてきたのである。

かくして「身体としての私」
の安全を求め、その維持を計
って生きているのが私たちが
あろう。これは生きていても
の根本的な欲求とも言え
る。ショーペンハウエルはこ
れを「生きんとする盲目的意
志」と言う。

仏教ではこういう「身体と
しての私こそ私自身だ」とい
う考えを「身見」「有身見」
といい、それは無明から起こ
っていると考えられている。

無明の一番具体的な相が「身
体を我と見る」身見であり、
この身見から解放されていく
道が仏法であるとも言える
のである。

老病死の苦も、身体の上に
必ず起こる老病死の現象に対

する。とらわれである身見から起る、と教えられているから、この身見が生活不安や健康不安の根源的な原因であると考えられる。

この「身体を我」と執する。とらわれから解放していく道が仏法であるとすれば、それは私たちではお念佛の道である。お念佛の道によって、こうした身見から解放されていき、最終的には一切の迷いや不安が消滅した涅槃へと至らして下さるのである。

ではなぜ、お念仏は身見から解放して下さる法なのであるか。

それはお念仏を聞くことによつて、量りなきいのちの仏こそ、私の主体であることをかすかながらも感知させて下さるからである。南無阿弥陀仏を聞くということは、阿弥陀仏が「ここにいます」(汝ともにいる)「お前のいのちとなつている阿弥陀がここにいます」との仰せを聞くのである。この阿弥陀仏にであうと、阿弥陀仏こそが真実の主体であることを感知させて下さるのである。

量りなきいのちの阿弥陀仏こそが実在であり、身体的な

私は仮の我であることをほのかながらも知らされるのである。老病死が現象する肉体を超えた、大いなる働き(如来)こそが私の主と知らされるのである。

そして量りなきいのちの如来は、肉体と別に働いているのではなくて、私の身体に即して働いているのである。

あえて言えば如来こそ真実の自己であると知らされるのである。

近世の偉大なる仏教者である清沢満之師は『龍扇記』に「生のみが我等にあらず、死も亦我等なり。我等は生死を並有するものなり。我等は生死に左右せらるべきものにあらざるなり。我等は生死以外に霊存するものなり」とまで言っておられる。我等(真実に自己)は生死(生老病死)以外に霊存するものであると表明しておられる。

もしこうした覚知が少しでも開けるなら、それは生活不安や健康不安から解放されていく道となろう。

もちろん、無明煩惱(身見)が一生離れられぬ凡夫の私たちであり、こういう私(自我)

を軸として現実生活をいとなんでいるのが実際の生活であるから、一生涯、不安煩惱はなくなるのであろう。

しかし、仏法にあえば、不安煩惱は真実の実在(如来)にふれる大事な縁となる。この意義は大きい。いわば不安は真実への扉を開く意義をもっているのである。

真実にあう大事な意味をもっている不安煩惱に対して、もしお念仏がなければ、不安煩惱はどこまでも嫌うべきもの、マイナス価値でしかない。毎日起こり来るさまざまの不安は、お念仏においては、真実(如来)とより親しくなる縁である。そしてより親しくなればなるほど不安は緩和されていくであろうし、喜びも深い。

現代人は、死後私はどうなっていくのかという(後生の一大事)に対する問題意識は乏しいけれども、生活不安や健康不安は大きい。この不安から解放されていく方法は、収入の安定や健康への努力だけではなく、身見から解放されていく仏法(聞名念仏)にあることを思えば、もっと念佛聞法に力を入れるべきではなからうか。(了)

正信偈に学ぶ同答

(五十八)

極重悪人唯称仏

我亦在彼撰取中

煩惱障眼雖不見

大悲無倦常照我

(書き下し) 極重の悪人は、ただ仏を称すべし。我また、かの撰取の中にあれども、煩惱、眼を障えて見たてまつらずといえども、大悲無倦きことなく、常に我を照らしたまう、といえり。

(現代語訳) 「きわめて罪の重い悪人よ、ただ仏の名を称えよ。わたしもまた阿弥陀仏の光明の中におさめ取られている。けれども、煩惱がわたしの眼をさえぎって、見たてまつることができない。しかしながら、阿弥陀仏の大いなる慈悲の光明は、そのようなわたしを見捨てることなく、常に照らして下さる」と源信和尚は仰せられた。

*

N 「極重悪人唯称仏」は、阿弥陀仏が「極重の悪人よ、我が名を称えよ」と私たちに仰せ下さるそのままを、聖人は正信偈に記せられたのでしようか」
D 「私はそう感じています。極重悪人唯称仏」は教義の言葉を超えて、阿弥陀仏の勅命と感じられます。これについて木村無相さんの歌があります。
道がある
道がある
道がある
たつた一つの道がある
ただ念仏の道がある
極重悪人唯称仏」
N 「有難い歌ですね」
D 「ええ、これは無相さんが五十歳半ば、若い頃からの長い間の求道の道に破綻して、もはやどこにも行き場がなくなつた。そこに、極重悪人唯称仏」との大悲の仰せに、最後にたつた一つの残されていた本願念仏の道を見出された、その喜びをうたわれたも

のです」

N「次ぎに（我また、彼の撰取の中にあれども）」というお心をお話し下さい」

D「我また、彼の撰取の中にあり」とは、私のような極重悪人にもかかわらず、私もまた阿弥陀仏の撰取不捨の大悲のお働きの中におかれては、有難いとお心です」

N「どうして阿弥陀仏に撰め取られていると知れるのですか」

D「それは南無阿弥陀仏とお念佛を称え、耳に聞くことは、極重悪人よ、ただ仏の名を称えよ」との仰せ、それを聞いているのです。そう聞いている阿弥陀がここにいる」と聞いていることにおのずとなります。ですから、ああ、こんな私にも阿弥陀様がついて下さる、撰め取って下さっている」と知るのです」

いているところに実感されている内容なのです」

N「次に（煩惱、眼を障えて見たてまつらず）」というのはどういうことですか」

D「御名を聞き、如来様の仰せを聞いているのですけれども、しかし如来様を見ることはできないということですか」

N「なぜ如来様を見ることはできないのですか」

D「私たちの心の眼は煩惱によつて濁っているためです。それはちようど肉体の眼が白内障になつて水晶体が濁れば、外の景色がぼやけて非常に見にくくなるようなものです。そのように私たちの心の眼は無明や貪愛瞋憎の煩惱によつて濁っているのです。阿弥陀仏は私とともにいて下さり、全ての生きとし生けるものに働きかけて下さつていて、それを目の前で見るようにクリアーに認識できないのです」

N「そのことを（煩惱、眼を障えて見たてまつらず）」といわれるのですね」

D「ええそうです。煩惱の深い自分を懺悔しておられるとともに、如来様は心の眼では見えない（けれども、大悲倦

きことなく、常に我を照らしたまう」と阿弥陀仏の大悲を喜ばれているのです」

N「なぜ見えないのに（阿弥陀仏の大きいなる慈悲の光明は、そのような私を見捨てることなく、常に照らして下さる）」と知ることができるとですか」

D「私たち凡夫は、阿弥陀仏の大悲のお働きは心の眼では見知しえないのですが、聞いて知るのです。仏教（涅槃経）では、真実の实在を目の前のものを眼でハッキリ見るように確認するのを（眼見）」とい

い、それに対して耳で聞いて知るのを（聞見）」と言われています。ここでは聞見なのです」

N「（常に照らして下さっている）」と知るのは聞見なのです」

D「ええそうです」

N「どうして聞見で（常に照らして下さっている）」と知れるのですか」

D「それは、お念仏を聞くと

N「お念仏を聞くというのは、南無阿弥陀仏と聞くのです

D「ええそうです。ナムアミダブツの御名を称え、その御

名を聞くとともに、阿弥陀仏の仰せを聞き、大悲のお心を知るのです」

N「ナムアミダブツと聞くことがどうして（常に照らして下さる）」と知れるのですか」

D「ナムアミダブツと聞くことは、（ここに在るよ、お前を助ける仏がいるよ）」と聞かされるのです」

N「煩惱具足の凡夫だから眼は見できないけれども聞見はできるのです」

D「ええ。凡夫にとつて、南無阿弥陀仏は声になつた仏です。声を聞くところに阿弥陀仏にあらうのです。これは驚くべき事です。声にまでなつて下さつたのは私たちを憐れんで下さる大悲の深きゆえです」

N「（常に我を照らしたまう）」とは」

D「阿弥陀仏が私とともにいて私を撰め取り、私を護り、導いて下さっているとお心です。月の光は闇夜を照らして明るくし、道を見失える者に道を示し、太陽の光は冷たい大地をあたため、万物を育てる。そのように仏の光は私たちに道を示し、私たちを浄

土に導いて下さり、私たちに邪な道に迷わぬように護り、豊かな真実へと育てて下さるお働きです」

N「阿弥陀様の大悲は常に私によりそい、浄土へと導き、育てるべく働かざるに働いて下さっているのです」

D「ええ、そのお働きは念仏の声とまでなつて（我は汝とともに在る）」（我は汝を離さない、撰め取つて捨てない）と喚びつめに喚んでいて下さるのです。その阿弥陀仏のお声が私に届いて、私の口から南無阿弥陀仏と出て下さるのです。阿弥陀仏は極めて近く、私によりそつておられるのです」

N「有難うございました」

（了）

《二〇一四年の出講予定》
来年（二〇一四年）の福井別院の予定は二回です。

*五月十九日（午後一時半）から二十一日（二時半）まで。

*十一月十七日（午後一時半）から十九日（二時半）まで。

福井別院の電話は〇七七六・二一・四一〇〇で、宿泊も出来ます。

木村無相さんの法信 15

(昭和五十七年八月三十日の木村無相さんから私へのお手紙。前月号からの続き)

○ 今回のお手紙のはじめに

「念仏往生の本願」の思召しの深さ

にひきこまれていきます

とあるが、それは

「念仏往生の本願」力のお力によって、だんだん引きつけられているのですねエ。おおいと

されば、ソクバクの業(逆誘^{ぎやくほう}センダイ、無仏法、無信)を持ちける身にてありけるを、助けんとおぼしめしたちける(「念仏往生」「口称の本願」)本願のかたじけなさよ、

と、いうように、本願力によって、ひきこまれつつ、あるのですねエ。

まったくの、無仏法無信の、ワレワレをここまで、連れ出して下されし、如来の御恩は、お力は、大したものですねエ。

私の底の底に(無仏法、無信、逆誘、センダイの底の底)まで見抜いて下さっている思召しに頭の下がる思いがします。

とありますが、その通りですねエ。

ないないづくしのわが心なれば、ただ念仏の仰せが、大悲の思召しが、身に浸みるようであります。

こうして「ないないづくしのこの身」であるのを、全く、知らなかったのを、「ないないづくしのこの身」と思い知らし、

ます。

と、「わが機のナイナイづくしである」

こと、このわが機をしらせるオハタラキ、

ただ念仏の仰せが、大悲の思召しが

身に浸みるようであります。

と、「そくばくの業(かぎりのない悪業)」

の身(機)と、思い知らせ、ナイナイづく

くしの我が機と、つくづく思い知らせ、

同時に、この機のための、お念仏の法と

思い知らしめる我が内面に、ハタラカレ

ル、オハタラキを、「他力廻向の信心」

「弥陀廻向の信心」というのであります。

○

如来ご回向の機法二種一具の他力信

心、弥陀ご回向のご信心によってこそ、

無い無いづくしの我が心、我が機と

思い知らされ、ただ念仏の仰せが、

大悲の思召しが、身に浸みるよう

あります。

として、「法」が、仰がれるのであって、

この「我が機」を知らしめ、「我が法」

をしみじみと思ひ知らせるオハタラキ

を、「他力廻向の眞実信心」「二種一具

の眞実信心」と名づけるのであって、こ

の、如来廻向の大悲心、「仏智」のこと

を「他力廻向の眞実信心」と名づけるの

であって、こうして、「我が機」を思い

知らしめ、「我がための法」を思い知ら

しめるオハタラキのホカに、別に、ナニ

カ、「眞実信心」というものがあるの

はないのですね。

ただ念
仏の仰せ
が、大悲
の思召し
が、身に
浸みるよ
うであり

ただこの、他力廻向の如来の大悲心、即ち、信心の智慧、仏智によってのみ、無い無いづくしの「我が機」、逆誘センダイ、無仏法、無信の「我が機」ということが思いしらされるのであって、いつの間にか、我が、煩惱妄念の意業の奥に、背後に、主体的に、忍び込みたまひし、如来の願心、「称我名字、若不生者不取正觉」の如来の大悲、大悲心、仏智のホカに、ナニか、「信心」というようなモノガラがあるのでなく、

「信心」とは、ワレラが、愚悪、無信の、無仏法の自性、本性の、意の背後、というか、奥というか、主体というか、にいつの間にか忍びこみたまうて、「我が墮つる実機」のスガタを、しみじみと、明らかに、知らしめたまい、

かかるワレラは、如来廻向のただ念佛よりほかに、出離の道はないとつくづく、しみじみ、思い知らせたもうを、「信心」と名づけるのであって、ウスカワマンジュウの中身は、アankoであるように、「他力信心、他力信心」といつている「眞実信心」の中身は、「アanko」は、如来の「助けんとおぼしめしたちける本願、願心」のことなのですよ。

○

助けんとおぼしめしたちける大悲の願心、第十八願が、ワレラの煩惱妄念の逆誘、センダイ、無仏法、無信の意の背後に、バックに、奥に、主体的に、忍び込みたまうて、「我が機の助かり無さ」を、しみじみと思ひ知らせ、こうしたワレラの助かる法は、お助けの法は、本願念仏よりホカに無いぞよと知らせたもう、我が内面の、我が迷妄の意の背後に、主体として、この我が

機を

大悲無倦常照我(身)

と、常に照らし照らして止まざる如来の撰取の光明、如来の大悲の願心、四十八願心、第十八願心のホカに別に、「眞実信心」というモノガラがあるので無いのですよ。

○

それをそうと知らないで、

我が迷妄の凡心〓意から、信ずる、

タノムの心を、おこさねばならぬ、

又、我が迷妄の、この凡心〓意に、

信じゴコロを起さねばならぬと思ひこん

でいるところに、ワレワレの、「迷い」

があり、また、無信の坊さん、先生たち

が、他力、他力といいながら、そのよう

な信心建立の自力信心のハナシを、マコ

トしやかに、話す、書くのを、本気に受

けとるところから、「信心」についての

ことが、マチガツテ、伝えられているの

ですよ。(続く)

《住職雑感》

十一月二十五日から二十七日まで、福井別院で法話・座談を繰り返した。福井での法縁が少しずつ広がって新しい聞法者との出会いが楽しい。いつまで続くか分からないが、一期一会の法縁を大事にしたい。法話のなかで、自分のことを話す場合、自分の自慢話になっていることがよくある。気をつけたいと思うのだが、根が自己顕示欲の煩惱が強いので、ついつい煩惱が法話にまじってしまう。人に自慢できるのようなのは何一つないのにもかかわらず、小さな事でも誇ろうとする。どこまでもお念仏だけが純粹仏法なのだと思われたい。